ニッポンをリードする企業たち
チャレンジングカンパニー

石原薬品
株式会社

石原薬品 株式会社

Company Profile

創業110年の歴史と先人の意思を礎に、開発主導の攻めの経営で新たな市場開拓に邁進する

電子部品用外装めっき液の国内トップシェア企業

明治33年（1900年）創業で、医薬品や工業薬品の卸小売業を営む「石原永壽堂」が前身。1946年に現社名の石原薬品に商号変更し、現在は「電子関連分野」「自動車用品分野」「工業薬品分野」の3分野で、「金属表面処理剤及び機器等」「電子材料」「自動車用化学製品」「工業薬品」の4つの事業をバランスよく展開している。中でも、ICチップ部品、コネクターなど電子部品用外装めっき液で国内トップシェアを誇る。

時代のニーズを捉えた新製品開発力に定評がある同社。研究開発に社員の3分の1を投入し、毎年メーカー部門売上高の10％を研究開発費に投資する徹底した開発主導の経営方針を貫く。2006年7月には本社敷地内に新研究棟を増設。各事業分野に分散している情報や技術をすべて研究開発部門に集約することで、より自由に、柔軟に、さまざまな角度から情報を分析し、コア技術に新たな発想を加えた新製品・新技術の開発に力を注いでいる。

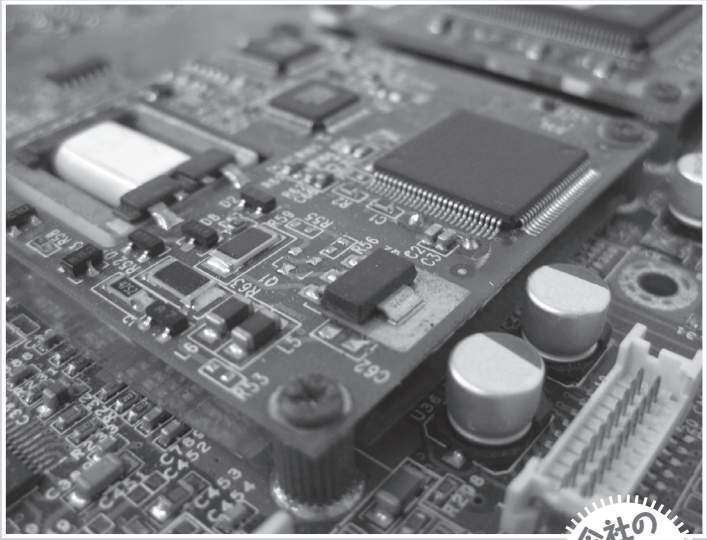
FOCUS

創業110年と長きにわたって成長を続けてきた同社の最大の強みは、開発主導の攻めの経営はもちろん、何よりも「人」を大切にする社内風土が築き上げられているからではないだろうか。それは同社の経営理念にも表れており、社員の研鑽を意味する「自己開発」が企業活動のすべての源泉であると取材者の門田尚也氏は強調する。同社に脈々と受け継がれる先人の意思を土台にして、そこで働く「人」が中心となって商品開発、市場開発に果敢に挑む姿は、成熟した日本経済に新風を吹き込むためにも必要な企業としてのあり方ではないだろうか。同社のように時代の声に常に耳を傾け、それに応えようと前進し続けることで、結果として新たな市場を切り拓いてマーケットリーダーとなることができるのかもしれない。

「三つの開発」を経営理念に未来をみつめる

創業110年の歴史と先人の確かな意思を礎にして、常に時代の先端を走り続けてきた石原薬品。激変する経営環境に対応するために研究開発に積極的に投資して、変化に強い筋肉質の企業体質を築き上げてきた。そんな同社の経営理念は「三つの開発」。社員ひとり一人の絶え間ない「自己開発」によって開拓者であり続け、独自の「商品開発」によって社会に貢献し、広く深い「市場開発」によって新たな可能性を追求し続ける。商品開発も市場開発もすべてはその源泉となる「人」の力があってこそ。だからこそ、社員が自己開発に励むことができる環境を徹底的に整備して、誰もがやりがいを持ち、明るく伸びやかに働くことができる風土を築いてきた。

老舗の良さを継承しつつ、常に既成概念を打ち破るために新鮮な発想で技術革新を起こし、時代のニーズに沿った製品を開発して高い市場占有率を維持している。4つの事業を推進する中でも、とりわけ業績をけん引するのが金属表面処理剤。電子部品用の外



電子部品用の外装めっき液で国内トップシェアを誇る

会社のイチ押し!

企業情報

■社名：石原薬品株式会社
■創業：1900年4月
■代表：代表取締役社長　竹森莞爾
■従業員数：223名（平成22年3月末）
■住所：兵庫神戸市兵庫区西柳原町5-26
■TEL：078-681-4801
■URL：http://www.unicon.co.jp/
■事業内容：金属表面処理剤及び機器等（錫及びハンダめっき液／化成処理液自動管理装置等）、電子材料（電子材料／セラミックス／エンジニアリングプラスチック等）、自動車用化学製品等（つや出し剤／塗装補修コンパウンド／洗浄剤／消臭・除菌剤／溶接スパッター付着防止剤等）、工業薬品（酸／アルカリ／触媒／無機化合物等）。

装めっき液で国内トップシェアを誇り、中でも人体に有害な鉛を使用しない鉛フリーめっき液に対する評価は高い。

常に先を見据えた新市場の開拓を目指す

経済大国・日本を根底で支え続けてきたのは紛れもなく中小企業である。さらに、創業１００年以上の老舗企業の約５割が製造業であるともいわれているように、ものづくり日本をけん引してきた製造業が日本の経済成長に寄与した影響は計り知れない。とりわけ、日本が世界に誇る電気・自動車分野の発展は目覚しく、同分野にて金属表面処理剤や電子材料、自動車用化学製品など時代が求める確かな高品質製品を提供し続けてきた同社の存在感は大きい。

ここ数年で日本の製造業がアジアなど海外への進出を加速している。同社も２００５年４月に上海に拠点を開設している。しかし、単に巨大な市場が広がるからという短絡的な発想ではなく、同社が日本で築き上げてきた技術を活かして市場をリードするべく、戦略的なアジア進出を視野に入れている。既存の市場は大切にしながらも、常に先を見据えた新市場の開拓を目指す――。新たな市場を創出し、マーケットリーダーになることが企業の成長のカギを握ると考え、新たなステージへと着実に駒を進めている。

インタビュー

常に先を見据えて新たな市場を切り拓き、マーケットリーダーになることが企業の成長のカギを握る

門田＝石原薬品（株）総務部 総務課 門田尚也氏
聞き手＝ブレインワークス

鉛フリーめっき液を世界に先駆けて研究・開発

――御社が得意とする電子部品用外装めっき液を詳しくお聞かせください。

門田　めっきの使途は大きくわけて「装飾」「防錆（ぼうせい）」「機能」の3つがあります。その中でも当社が注力するのは「防錆」と「機能」です。「防錆」とは文字通り「さびを防ぐ」ためのもので、「機能」というのは電子部品などの機能性の向上を目的にしています。「電子部品用外装めっき液とは何か」を理解いただくためには、家電や携帯電話などに内蔵されている電子部品をイメージしていただくと分かりやすいかもしれません。半導体などの電子部品は、プリント基板との接合部分に主に銅材が使われているのですが、その接合部分には、プリント基板との接合を容易にするためにハンダめっきが施されます。当社は、そのハンダめっき液の開発・製造を行っているのです。

――どのようにして国内トップシェアを握るまで成長されたのでしょうか？

門田　1970年代、弱電業界では、製品の急激な需要増という絶好の機会を持ちながら、一方で重金属による公害発生や金属資源の不足に直面するという皮肉な巡り合わせが起きていました。そこに、重金属を含まない当社の錫めっきが登場し、市場の殆どを占めるようになったのがキッカケです。以降、当社は環境汚染問題に着目し、鉛の規制が叫ばれる以前から、鉛フリーめっき液を世界に先駆けて研究・開発するなど、絶え間ない開拓の努力を続け、これが高い市場占有率の確保につながっています。市場を創出する製品をいち早く開発したメリットは大きく、マーケットリーダーとして市場をけん引し続けることができています。

石原薬品(株)
総務部 総務課
門田尚也氏

少量でも素早く、強固に結合させる高い機能性

――では、御社の電子部品用外装めっき液の機能的な特長をお聞かせください。

門田　携帯電話を持ち出すまでもなく、最近の電子機器は総じて小型化が進んでいます。それは、当社の電子部品用外装めっき液が使わ

れる電子部品とプリント基板の接合面も小型化していることを意味します。しかし、たとえ接合面が小さくなったとしても、少量のめっき液でも機能性を維持させなくてはなりません。当社のめっき液は少量でも素早く、強固に結合させる接合性（ハンダ付け性）に優れており、多くのクライアントから支持をいただいています。さらに、その支持を後押しするのが、当社のアフターフォローを含めた営業戦略です。例えば、顧客に販売しためっき液の定期的な分析を行うなど、納入済製品の品質検査を製造元が行うことのメリット（顧客の信頼度の向上、対応の速さ）を最大限に活かしているのが当社の強みであり、これらのサービスの過程で得た顧客の声を新製品開発の源泉とするなど、すべての顧客接点を活かした事業展開に注力しています。

新商品の開発も、新市場の開拓も「人」がいてこそ

――御社は研究開発のために多額の投資をされています。企業にとって、直接的な利益を生むかどうかわからない研究開発に投資するのは時にリスクとなる可能性もあります。それでも御社が先行投資を続ける真意はどこにあるのでしょう。

門田　既存の市場を大切にしながらも、常に先を見据えて新たな市場を切り拓き、マーケットリーダーになることが企業の成長のカギを握ると考えています。変化の激しいこの時代に次なる一手を打つためには、コア技術に新たな発想を加えた新製品・新技術の開発に注力し続けることが重要と考えます。だからこそ、研究開発に社員の3分の1を投入し、毎年メーカー部門売上高の10％を研究開発費に投資しているのです。その根底には、当社の経営理念である三つの開発（「自己開発」「商品開発」「市場開発」）が深く根付いています。中でも「自己開発」が1番目に挙げられているように、当社は「人」の育成に何よりも重きを置いています。

――御社の強みの源泉は「人」にあるのですね。

門田　いくら優れた新商品を開発しようとしても、いくら新市場を開拓しようとしても、そこで働く人の力が足りなければ実現させることはできません。2006年7月に本社敷地内に新研究棟を増設したのも、すべては研究開発員の方々の働く環境を整備して、より自由に、より柔軟に技術革新に集中してほしいと願うからこそです。他にも、充実した福利厚生制度や自己開発支援も行い、社員のレベルアップを企業として応援しています。ここで働く私が客観的に見ても、正直、とても働き甲斐のある会社です。会社が本気で社員のことを考えてくれるからこそ、私たちもその思いに応えて自分を高める努力を必死で続けることができるのです。

新設された研究開発棟にて研究員が日夜、新製品・新技術の開発に注力している

築き上げてきた技術と経験を活かし、アジアでも新市場の創出を目指す

——電子関連以外の分野の製品についてお聞かせください。

門田　自動車用品分野では、「UNICON（ユニコン）」ブランドの消臭・除菌剤やワックス、タイヤコートなどが好評です。しかし、昨今、ホームセンターなどのカー用品コーナーが縮小傾向にあることから、ガソリンスタンドや車検修理工場で使われている補修剤、洗車機用洗剤など、業務用に特化した自動車用化学製品の強化を図っています。さらに工業薬品分野では、当社独自の技術を活かして鉄鋼メーカーなどとゴキブリよけの防虫鋼板を共同開発するなど、企業の間に入ったコーディネーター的な役割も果たしています。

——可能性が広がるアジア市場の開拓を見据えた展開もされていますね。

門田　2005年4月に上海に拠点を開設し、中国・韓国・台湾などで市場開拓の手応えを感じ始めています。今後も、アジアを中心とした海外でのビジネス展開を多角的に推進していこうと計画中です。

——例えば携帯市場だけをみてもアジアはビジネスチャンスの宝庫だと思いますが。

門田　世界人口68億人の半数がアジアに住んでおり、いまなお人口が増え続けています。携帯市場に限らず、電子関連業界は人びとの生活を豊かにし、便利にする役割を持っており、確かにアジア圏の成長分野といえるでしょう。その中で市場拡大の動きを冷静に見極め、まずは当社が築き上げてきた独自の技術やサービスを最大限に活かし、それと共に新たな市場を創出する意気込みでアジアへチャレンジしたいと考えています。

——最後に今後の展開をお聞かせください。

門田　既存のコア技術を磨くだけではなく、日々の研究開発によって事業領域の拡大も視野に入れています。すでに長く時間をかけて研究開発を手がけてきた製品が着々と芽を出し始めています。電子材料関連分野を重点分野と位置づけて、近い将来、第5の事業の柱を打ち立てたいと考えています。今後も愚直に技術開発にベストを尽くし、時代のニーズの創造・発掘に邁進していきます。

——これからのご活躍にますますの期待をしております。ありがとうございました。